支援の質の向上のための基礎的研究

永瀬 美帆（大阪観光大学）

問題の背景

わが国における子育て支援は、これまで、子育てしやすい労働環境の構築や子育て家庭への金銭的支援、保育サービスの充実化などの施策や、地域の子育て支援センターおよび保育所・幼稚園における子育て支援などを中心として、育児の社会化の実現を目指し、子育て環境の整備に努めてきた。しかし、いまだ十分なものであるとはいえない現状がある。森田（2011）は、これまでの子育て支援策を概観し、日本の子育て支援が子育てしやすい環境づくりのために法整備を含めて一定の役割を果たしてきたことは評価するとしながらも、いまだに子育てをする人が子育て支援の充実を実感できない社会であると指摘している。そして、これまでの子育て支援策の問題点として、あくまでも年金や労働力人口の減少から生じる「生産力」の低下を恐れた「少子化対策」としての子育て支援であって、家族形成に差しかかる若い世代や実際に子育てしている家族の苦悩・不安の解消に向かうための支援ではなかったという点を指摘している。宮本・藤崎（2011）は、日本の子育て支援が、近年、社会全体で子育てを支えるという方向へ転換し、父親も視野に入れ、仕事をしているか否かに関わらず全ての家庭を対象として、子どもや子育て家庭を取り巻く環境の変化による育児不安の増大や虐待の増加への対応としての子育て支援が実施されるようになってきたと述べており、近年になってようやく、日本の子育て支援は質的な充実へと向かい始めたといえる。

森田（2011）は、このような事情からもたらされた、日本の子育て支援策に最も欠けている点のひとつとして、近年の研究で「子育て基盤」が挙げられていることに触れている。子育て基盤とは、家族形成や子育てをするために基本的に必要なはずの労働環境、収入、人々の支えといった、子育てにかかわる基礎的支援のことであり、子育てをするための前提条件とされている。このうち、本研究では、人々の支えの側面に焦点をあてたい。この点に関しては、これまで、十分とはいえないまでも、地域の子育て支援センターや保育所・幼稚園における子育て支援という形で一定の取り組みが行われ、地縁・血縁に代わるネットワークの構築も試みられてきた。

全国の複数地域の公立・私立・国立附属の幼稚園の園長を対象に、預かり保育、子育て相談、就園前の親子への支援の 3 つのプログラムについて実態調査を行った立石ら（2004）は、幼稚園における子育て支援の特徴として、「日常性」と「親子双方の育ちの場」の 2 点があることを明らかにしたが、幼稚園における子育て支援はまだ過渡的な段階にあるとも述べている。保育所・幼稚園における子育て支援の実践と実践研究の動向を概観した宮本・藤崎（2011）も、園における子育て支援はいまだ子育て負担の軽減のための支援が中心であり、親の育ちを支えるような支援は始まったばかりであることを指摘し、数の充実と共に質の向上の必要性にも言及している。また、増田ら（2009）は、幼稚園・保育所における子育て支援の実態と保護者のニーズについて調べ、保護者と保育者が双方とも子育て相談の時間と人材を求めている実態を示し、園で子育て支援を行う際の重要な課題として、子育て支援者の確保と資質の向上、子どもをもつ保護者や地域のニーズの把握を挙げている。増田ら（2009）の調査は青森県におけるものであるが、当該地域特有の課題とは考えにくい。

以上のことから、これからの子育て支援においては支援の質の向上が非常に重要な課題であり、子育て基盤のひとつである人の支えという面でも、その支援の質の向上が求められており、そのための人材育成は急務であるといえる。

関心の所在

増田ら（2009）は、支援人材の確保ということに関して、高齢者世代や次世代（小・中・高校生や大学生）の活用に言及しているが、適切にサポートを届けるためには研修の場を設けることが望まれると述べている。草野ら（2009）も、地域共同体の機能が衰退する現代、隣近所の住民から自然に支援を受けるといったような昔ながらの子育てができる地域は少なくなっており、親族以外の地域住民が子育て支援者となるには、何らかの社会的取り組みが必要であるとしている。

さらには、親族であるか親族以外であるかに関わらず、また専門家であるか否かに関わらず、その支援の在り方も問題となる。育児期にある母親に対するソーシャルサポートと育児ストレスとの関連性を調べた荒木ら（2001）は、ソーシャルサポートは、非効果的であったり、周囲の人がストレッサーやストレス反応を強化したり、余計なおせっかいであったりする場合もあるという指摘に触れ、サポートの人数や種類（ネットワークの数）はたとえ少なくても、その人にとって十分なサポートが受けられているか否かが大切であると述べており、どんなふうに支援を行うべきかも非常に重要であることがうかがえる。実際、従来身近な子育て支援の重要な人材として考えられてきた祖父母について、三輪ら（2005）は、祖父母自身が支援者として十分な能力を持っているとはいえない状況も見受けられると指摘している。三輪ら（2005）が母親の子育て不安と祖父母とのかかわりについて調べた結果からは、夫の親と同居の場合の母親の子育て不安は核家族よりも高く、祖父母が母親の子育て支援に有効に作用しているとはいいがたい状況が見られたことを報告している。

以上のことから、潜在的な支援者を含め、人材を有効に活用していくためには、それぞれの特徴を見極め、どのように支援することでもっとも支援効果が高まるのかについて明らかにしておく必要があると考えられる。そのための基礎的研究として、まずは子育ての中の親子や育児の困りごと場面に遭遇したとき、どの程度の関心を持ち、何に注目して、どのように対処するのか等について子育て経験者と未経験者の意識や態度の差異や年齢的発達等について明らかにしてみたい。

引用文献

荒木美幸・大石和代・岩木宏子・渡辺鈴子・池田早苗・達田志津子・小川由美子「育児期にある母親に対するソーシャルサポートと育児ストレスとの関連性」『長崎大学医療技術短期大学部紀要』2001 年 pp.89-95

草野恵美子・小野美穂・高山智子「乳幼児を育てる母親における親族以外の子育て支援者の実態と支援内容の特徴」『千里金蘭大学紀要』pp.91-99

増田貴人・管田貴子・伴碧「青森県における子育て支援の実態と保護者のニーズに関する調査（3）保育者への調査によるニーズの把握と今後の課題」『弘前大学教育学部紀要』第 102 号 2009 年 pp.87-96

三輪聖子・内田照彦・木澤光子「次世代育成支援における祖父母の役割について―母親の子育て不安とのかかわり―」『岐阜女子大学紀要』第 35 号 2006 年 pp.79-83

宮本知子・藤崎春代「我が国の保育所・幼稚園における子育て支援の実践および実践研究の動向」『昭和女子大学生活心理研究所紀要』第 13 号 2011 年 pp.127-133

森田美佐「「子育て支援」はもう十分か？－2000 年代からの日本の子育て支援策の成果と課題－」『高知大学教育学部研究報告』第 71 号 pp.187-196

立石陽子・安藤智子・岩藤裕美・丹羽さがの・金丸智美・荒牧美佐子・砂上史子・無藤隆「幼稚園における子育て支援の実態調査」『お茶の水女子大学紀要』第 2 号 2004 年 pp.27-37